

山本哲照氏「没後68年の亡父の剣道修行…」のご投稿内容に物申す

(ひろしまの田舎侍) 井尻 淳

山本氏の標記ご投稿の動機は、職場の同期であった私との交流を契機としたとのこと。お父上の故郷、東北の大正・昭和の農村における次男坊の立場と剣道修行など、私の少年時代・青年時代を農村で過ごした類似点があり、門外漢ながら、山本氏のご提言もあり、「広島 of 田舎侍」のたわごととして投稿させていただきます。

山本氏と同期と言いながら、私は5歳年長である。これも第二次世界大戦に起因する。出生は、被爆地ヒロシマで、原爆ドームから数百メートルの位置であった。

幸いにも、原爆投下の4か月前に広島市から60キロ県北の母方の祖母の家に家族6人で縁故疎開し、被爆しないで生き延びてきた。祖母の家とは言え、当時は電気も通じていない戸数10数戸の山里。農家の水車小屋での生活が始まった。同様に、近所のお寺には、広島市からの学童疎開の集団数十名が寝泊まりしていた。

夜は菜種油を燃すカンテラを付けて灯りとしたのをよく覚えている。そこで、農村の閉鎖的な習わしを学んだ。疎開者という疎外感で見られるのを子供心に感じていた。小学校では、いまのような陰湿ないじめではないが、よそ者としてのいじめに類するものがあった。振り向けば、8歳から21歳まで疎開先の農村で過ごしてきた。実体験として農家の田地・田畑には限りがあり、次男・三男坊は都会に出て、自活の道を選ばざるを得ない。その背景がよく理解できた。

山本氏のお父上もその事例と思われる。とくに、耕作地の少ない東北地方では、その事例が多かったように考えられる。

私の田舎の中学同級生にも、自活のために自衛隊（当時は、警察予備隊）に入隊した者が数名いた。私も21歳の時、出生地である広島市内に出て、夜間高校（商業科4年制）に入学した。同級生のほとんどが田舎の次男・三男で、昼間は酒屋・八百屋・魚屋などの商店に住み込み丁稚小僧として働いていた。女生徒は、母子家庭が多く、父親は戦死または原爆で亡くなったものが多かった。同級生と言っても同学年で、年齢差が10歳もあった。中には、教師より年上の者もいた。当時は、現在のようにコンビニエンス・ストアがあるわけでもなく、一番成長する時期に夕食も食べないで授業を受けることは＝空腹と睡魔＝との戦いであった。夜学生の「学びへの飢餓」意識と意欲・集中力は、昼間部の学生とは大きく勝っている、と豪語したい。

我が家の長男は、親に予備校まで行かせてもらって医学の職に就いていた。が、次男の私は、疎開先での住む家もままならぬ生活の経済的理由で高校進学をあきら

めざるを得なかった。これも次男坊の宿命かー。と無理やり自分を納得させていた。そこで、私は中学卒業と同時に、父を師匠として、洋服仕立職人（テーラー）に弟子入りした。その修行は親子の関係を断ち切ったもので、厳しいものがあった。

それは、他のお弟子さんもいたし、同じ年で父親が戦死した戦災孤児の従弟もいて、親に甘えることは許されなかった。ある時、同級生が私の仕事場に来て「ちょっと訊くんじゃが（方言）、あれは本当のお父さんー？」と尋ねられたことがある。外部の人にも厳格に見えたのかー。それは、自己を厳しく律していた証左であろう。

さて、本題の剣道の修行であるが、私が剣道に出会ったのは、戦地から復員した叔父が、田舎の青年団の試合に出場し、優勝の姿を見たこともあり、剣道にあこがれを抱いていた。剣道防具は、疎開時に隣の農家の次男坊が大阪で剣道防具職人の修行を終えて、広島に帰って来られ、私のために特別に調整してもらったもの。

それを契機に洋服職人としての修行の傍ら、近くの警察道場に通い、「礼に始まり、礼に終わる」剣道の所作ごとから、「竹刀の持ち方、振り方、足さばき」の手ほどきを受けた。その時の先生は、小柄な「苦学力行の士」で、天覧試合に出場された剣士と伺っていた。私も小柄で、この先生にとくに目を掛けて頂き、この基本稽古の繰り返し、私の生きざまの基盤になっているように思われる。

さて、空腹と睡魔と闘った夜間高校卒業時に教頭の指導もあり、広島浅野藩をルーツとする学校法人の短期大学（夜間部）に入学・卒業した。その後幸運にも、同じく4年制大学への三年編入（昼間部）することが出来た。これまでの夜間の学生生活から、輝く太陽を身体いっぱい浴びての大学生活は、特にまぶしく天国の心地…。

すぐに、剣道部に入部し、念願の剣道の修行に再挑戦した。されど、剣道部三年生の位置づけではあったが、後輩たちは、先輩として立ててはくれたものの、実際の稽古では、高校時代に国体出場経験者、武道の本場九州出身の猛者ばかり、適切な言葉が見つからないが「ボコボコに打たれた」という記憶しかない。その打たれた「悔しさと痛み」の記憶をバネに、卒業後、山本氏と同じ新聞社に就職してからも、仕事をさぼって、剣道の修行を重ねてきた。

※取得した段位については、「自分から言い出すものではない。剣の修行を通じて醸し出される人間性を磨け」と、ある範士から訓示を受けたこともあり、そのように行動したい。すなわち、修行と学びには「素直さと謙虚な態度」が肝要と心得る。

さて、そこで山本氏の標記の投稿の中に、高校時代の剣道部に入部して、「先輩は神様」とか言った封建的な上下関係に耐えられなくて、早く退部したと記されているが、私の剣道修行の体験からすれば、「それは、剣道の本質を離れた軟弱な言動」と断じざるを得ない。

それは、お父上の剣道全国大会・優勝実績の骨格と闘志を遺伝子として持ちながら、それを引き継がなかったこと、体現しなかったことは、大変もったいない事と感ずるからである。とくに、大正・昭和初期の剣道は、いまとは比較にならないほど、ルールもない実戦的な厳しいものであった、と諸先生からも聞かされている。

上記の記述は、山本氏と同期だから言えることでもあり、上から目線の見下した表現は、友としてご寛容願いたい。実は今回の私の投稿の源泉は上記の数行にある。

上記に関連して、気障な表現となるが、私は少年時代をスタートとして、洋服仕立職人としての修行と剣の道の修行の二つの険しい道を歩んできた。いま流に表現すれば、ダブルワークの実践と体現、卑近な表現をすれば、常に「二足の草鞋を履いて」生きてきた。

それが、新聞社に就職しても、軽薄なサラリーマンでなく、あらゆる職務を自分のもの、自分のこととして真摯に（職人氣質で？）取り組んできたと自負している。

それを交流のあったビジネス社会の人も見ていたのであろう…。定年前に社員教育コンサルタント会社その他数社からの執拗な引き拔きの声が掛かり早期退社した。いまもその関連会社に籍を置き、「生涯現役・生涯剣道」実践の道を歩んでいる。

さて、世間では新聞社に勤める人は、みんな記者であるとよく勘違いされ、「文書がお上手ですね」と言われるが、決してそんなことはありません。上述の脈絡のない駄文をご笑覧あれ…。新聞社には「きしゃ（汽車）も走っておれば、でんしゃ（電車）も走り…私は電車の乗務員（笑）」。二人は時代の流れを鋭く読みとる洞察力・明晰な頭脳と豊かな創造性の資質を要する企画局・出版局に所属しておりました。この部局は、「工業立国」の社是に当時の経済・工業振興に大きく貢献する面白い職場でした。

但し、私は地方の支社勤務の田舎侍。小田原高等学校・第11期生の皆様のように洗練されておりません。こうした場に投稿したこと、自省しております。

とくに、縷々記したとおり私は夜間部の学生生活が長く、働きながらの学びで、正式に机に向かって勉強した記憶がありません。皆様とは年齢差がありますが、昭和の高度成長期を共に企業戦士として生き抜いた同士と心得、親近感を持ってご投稿を楽しく拝読致しております。今回の機縁に感謝です。ありがとうございました。